

14 明治期の一避病院における看護管理の状況

上坂良子¹⁾・水田真由美²⁾

¹⁾前和歌山県立医科大学保健看護学部

²⁾和歌山県立医科大学保健看護学部

はじめに

明治期の後半に、東京市の避病院としてその使命を果たしていた「駒込病院」があった。この病院は、明治三十年（一八九七）に伝染病予防法が制定されたことに伴って、東京市が所管運営する病院として新築改造され、この頃の伝染病に関わるセンター的な役割を担っていたことが「日誌」史料から窺える。

駒込病院には、勤務する医師（東京帝国大学医科大学から派遣）らによって記録された「当直日誌」が残されており、平成十一年に「駒込病院医局日誌抄」として編纂出版された。期間は明治三十二年から四十二年迄である。この中には、医師・看護師の職務上の活動、あるい

は、勤務時間外の人間的な交流、医師による看護師育成講習（教育）など、また、看護師は医師の権限下にありながらも、看護の主体性および他部門（医師・薬剤師・事務系）と協働する姿が描かれており、チーム医療の原点ではないかと考えさせられる場面が散見する。

今回、「医局日誌」から見えてくる最も注目した点は、「一避病院の看護管理」の状況である。近代看護の教育を受けた看護師の行動が、看護管理概念の形成過程の時期として今日に何を示唆しているかを考察した。

医局日誌からみえる看護管理の状況

医師と看護師との関係では、当時を評して語られる単純な従属関係ではなく、ある面では看護本来の実践を心がけ、看護を中心とした伝染病医療への熱意が窺えたことである。この関係は、今日のマトリックス組織といわれる看護管理体制の原点のようにも感じられる。この病院の伝染病者の看護、すなわち、急性期の看護は、背景にある医学的な進展からみれば時代の先端を語る看護ではなかったかと思われる。しかし、他方、市井の人々の通念には、隔離される伝染病は死と直結したイメージが

あり、強制収容される恐怖が伴った。医療者である看護職からも敬遠され、駒込病院の看護要員も絶えず人手不足を問題にしている。にもかかわらず、患者の収容に際し、駒込病院は伝染病医療の拠点のような位置にあり、必要に応じて「本所病院」「大久保病院」「広尾病院」を開設し、そこへ駒込病院から人材を派遣してそれぞれの病院が機能するような役割を果たしている。組織化の中心にいたのは結論的に看護部門であった。

看護師たちは院外研修にも熱心であったことが窺える。この頃、既に看護界で著名だった大関和が主催する研修会参加の様子も「外出を許可する」と記録されている。

「駒込病院医局日誌抄」を通して見えてくる看護管理の状況について特徴的な五点と、

以下その概要を述べる。

- 一 看護部門の組織図の人事、業務、教育について決定は、医局の権限下におかれていた。
- 二 看護部門の責任者である「杉本取締」の役割の一つに、駒込病院外三施設（本所・広尾・大久保）の

看護責任者を兼務していたことから、開設（組織化）時の要員配置、設備物品調達等の権限があった。ここの考えや行動には、チーム医療の発想がある。

三 看護要員不足に対し、「派出看護婦会」から、臨時、臨時採用者を確保していた。東京看護婦会（大関在職中）からの採用もあった。

四 杉本取締（後に婦長と呼称）は、主任制を主張し（実現）、後任の教育を行っていた。

五 看護教育について

① 院内感染予防のため、医局が医員職務規定、衛生消毒規定、看護婦掛規定を作成し院内活動を活性化していた。医師や看護師、職員が感染し死亡する事態もあり、衛生消毒規定の実践が強化された。

② 看護要員不足および院内感染予防の点から独自の募集・養成を行った。

おわりに

日誌から全容は見えないが、看護職は全てに従属していたわけではなかった。（文献略）